

ビデオ 通信

2012年
10月18日(木)
No.3625

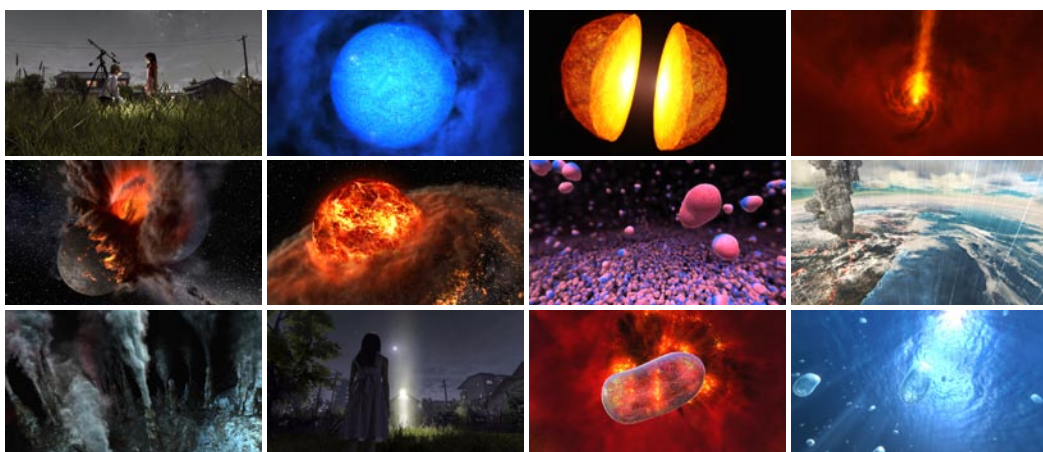
毎週月・木曜日発行
1ヶ月¥11,550(税込)
発行：飯澤剛
編集：齋藤浩一、齋藤知香

ユニ通信社

東京都千代田区神田司町 2-10
神田司町国土ビル 2F 〒101-0048
TEL : 03-5256-1521
FAX : 03-5256-1525
E-mail : vt@uni-press.net

ライブ

『ETERNAL RETURN ～いのちを継ぐもの～』 EPISODE 1 壮大な宇宙のストーリーを通じて、宇宙といのちのつながりを伝える



© 有限会社ライブ

㈲ライブが制作したフルドームデジタルプラネタリウム映像『ETERNAL RETURN ～いのちを継ぐもの～』 EPISODE 1 が、コスモプラネタリウム渋谷（渋谷区）および府中市郷土の森博物館（府中市）で公開されている。祖父と孫娘の物語をモチーフとし、宇宙の始まりから原始地球の誕生に至る壮大なストーリーを通して、生きものが生と死を繰り返しながら少しずつ前進していくこと、いのちをつないでいく大切さを伝えていく。監督は昨年「映文連アワード 2011」のグランプリ作品『HAYABUSA BACK TO THE EARTH』を手がけた上坂浩光氏。企画・制作期間は約1年半。今回はフルCGだけでなく実写合成によるフルドーム映像にも挑戦している。同作品は三部作の第1弾となるもので、エピソード2は2013年度に制作する計画だという。なお、トレーラー映像が公式サイト（<http://www.live-net.co.jp/er/>）やYouTubeで視聴できる。

いのちが伝わっていくことの本質を伝える

『ETERNAL RETURN』のコンセプトは、「永遠の回帰」という意味のタイトルに込められている。

上坂氏は「生きものは「死」という宿命を持っていますが、いのちは次につないでいくことに本質があると考えています。さらに、つながっているのはいのちだけではありません。宇宙ができた時の3種類の原子から始まり、星の中で核融合によって新しい原子が生まれ、その星が死ぬことでその原子が宇宙空間に散らばり、それらが集まって新しい星が生まれ、その周りに惑星ができ



企画・制作：(有)ライブ／監督・シナリオ・絵コンテ・プロデューサー：上坂浩光／プロジェクト・マネージャー：下山田和弘／シナリオ協力：高島規子／音楽プロデューサー：安念透／作曲：山下宏明／音楽録音：小幡幹男／CGディレクター：上坂浩光／アシスタントCGディレクター：畑間隆幸／CGデザイナー：伊東整、執行正義、武貴寛、日高肇／プログラミング：下山田和弘／ミキシング：前島慶太／音響効果：山内悟／撮影：片岡高志／VE：西村友秀／照明：下田栄治／モーションコントロール：村木一州、角倉啓子、堀靖祥／監修：梅本智文、高井研、原口徳子、山口正視、森田洋平、宇佐美徳子／データ提供：武田隆頭／協力：国立天文台、海洋研究開発機構、情報通信研究機構、高エネルギー加速器研究機構、(有)エンブリオ、(株)アストロアーツ、科学技術館、高幣俊之、(株)東京サウンドプロダクション、ローカスト、(株)アパコ撮影スタジオ、CATUSEDTELESCOPE、(株)イメージサイエンス、斉場有明、斉場由布

作品になっているのではないかと考えています)

企画構想は『HAYABUSA』を完成させてすぐのこと。2011年3～9月にシナリオ執筆、7月からCG制作を開始した。『HAYABUSA』制作時は18台だったワークステーションも20台増設して38台体制に。増設した最新機種は従来の約2倍の処理能力を持っているが、今回は多岐にわたるシーンのモデリングやレンダリングが必要だったため、CG制作には丸1年間かかったという。

また、『HAYABUSA』の時と同じように、今回も詳細な資料データはなかったが、地球に巨大隕石が衝突し、月ができたといわれる「ジャイアント・インパクト」に関しては、国立天文台からシミュレーションデータの提供を受けた。

さらに、これまでライブが制作してきた作品は全てフルCGだったが、今回は実写も併用しているのも特徴だ。撮影にはCANON EOS 5D Mark IIを使用している。

〈CGで“人”を表現するには限界があると考えています。CGと実写の組み合わせでは、カメラ

る。その1つが地球であり、私達の身体を構成する原子も宇宙からやってきた。宇宙は、生命も含めて生死が大きく繰り返して行く中で、少しずつ前進しているのではないかと考えています。10年前から「いつかそういう作品を作りたい」とずっと思っていて、最初に作った『HAYABUSA BACK TO THE EARTH』(以下、HAYABUSA)も、いのちが伝わっていくことが大事であることをテーマとしていますが、今回はさらに具体的に、宇宙の始まりから星が生まれて死んでいくことを通して、いのちの誕生を描いていく。でも、伝えたいコンセプトは同じです。祖父と孫娘による物語の中で、宇宙や死というものを考えてもらう作品になっています〉とする。

「宇宙の誕生と生命の関係」を“ドーム映像”で表現

『ETERNAL RETURN』は三部作の第1作という位置づけで、宇宙の始まりから地球で原始的な生命が生まれるまでを描いているが、第2弾、3弾では生きものが進化したり、生きものが心を持つところまでステップアップしていく。「宇宙の誕生と生命の関係」は科学映像における究極のテーマ。数多くの映像制作者がこのテーマで作品をつくっているが、今回は上坂氏独自の視点でこのテーマに挑戦した。

〈最大の特徴はドーム映像で作ったことです。ドームは空間を体感できる。ファーストスターや太陽が生まれた時、ジャイアント・インパクトの瞬間など、そこに居合わせたように体感できる新しい切り口の

の視点の情報等をマッチングさせなければなりません。様々な方法がありますが、今回はカメラマッピングとモーションコントロールによる回転台を使いました。あらかじめ CG ソフト内でシミュレーションした一種のプレビズによるカメラの動きを、そのまま回転台の動きに変換します。さらに、撮影した実写を仮想の板にマッピングすることで、撮影は回転だけですが、寄りや引きの映像が実現します)



『HAYABUSA』以上に時間を擁した CG 制作作業が行われたライブ社内

また、人物が出てくる「物語」をドーム映像の中で展開させる難しさもある。〈映画にはフレームがあるので、クローズアップやモンタージュなど様々な手法が使えますが、ドーム映像は基本的に演劇を見ているようなものなので、観客に特定の注目ポイントを与える演出がしにくかったり、人物のフレームイン/アウトもできない。ただ、象徴的な物語にしたかったので、劇映画のように過剰な人間ドラマの演出ではなく、ベースストーリーの一部を切り出してつなげていくようにしました〉

伝えることは正確に、ビジュアルは感覚的に

さらに、この作品では天文学、地球物理学、素粒子物理学、生物分子学など、多分野にわたる事象を描いているため、国立天文台、海洋研究開発機構、高エネルギー加速器研究機構、情報通信研究機構、千葉大学真菌医学研究センターなど、様々な研究機関が監修している。

〈今の科学者は専門分野には深い知識を有しているものの、少し外れてしまうと語れないので、



『ETERNAL RETURN』の裏テーマは「我々はどこからきたのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」という上坂浩光氏。〈ゴージャンの有名な言葉ですが、最先端の研究者に「何故この研究をしているか?」と聞くと、みなさんの回答が全てここに集まります。科学者といえは非日常的な世界で、論理的に研究を進めているだけの感じですが、1人1人のきっかけや“思い”は私たちと全く変わらない。科学とは本来そういうものですね。今回の作品制作によって、それが確認できて少し嬉しかった〉とか

それらをつないでまとめていくことに苦労しました。また、宇宙で最初にできた星がどのように見えるのか、原始地球の色など、今の研究成果だけでは「わからない」ことが沢山ある部分を映像化する難しさもありました。伝えるべきことは正確に伝える一方で、曖昧な部分のビジュアルについては、私の感覚で作らせていただいた部分もあります〉

なお、月刊天文雑誌『星ナビ』の2013年1～3月号で、『ETERNAL RETURN』の監修者執筆による科学的な解説記事が掲載されることになっているという。

〈『ETERNAL RETURN』は、おじいさんと孫娘の話を柱として“時間軸”を体感してもらう作品ですから、映像では細かい科学的説明はしていません。これを入口にして書籍などで調べてもらえばいいと考えていますが、それでは「作り手」として無責任ではないかと考えました。連載終了後はプラネタリウムなどで配布できるパンフレットにできるのではないかと考えています〉

(次ページに続く)

観客の反応がクリエイティブのチカラに

前作『HAYABUSA』によって日本全国での講演会が非常に増えたことが〈今後のクリエイティブ活動に大きな影響を与えてくれる〉という上坂氏。〈自分が作った作品で何かを感じてくれたことが嬉しいですし、それを直に聞ける喜びがあります。制作者は観客の感じ方を想像しながら作品づくりをしますが、実際に感想を聞くと、それを遙かに超えて様々な感じ方をしてくれています。全く別のとらえ方で、逆に教えられることも多い。「作って良かった」と実感し、作品制作への意欲につながるパワーをいただけるのが嬉しい。『ETERNAL RETURN』はどちらかといえば、高齢者の方々に観ていただいた感想を、是非聞いてみたいですね〉と話している。

◇ライブ <http://www.live-net.co.jp/>